

# 天皇の権威について

## 第4章 北条泰時

以下は、山本七平の名著『日本人を動かす原理・「日本的革命の哲学」（1992年）』をもとに、北条泰時に関して、私なりに判りやすく簡単に説明したものである。詳しくは、是非、山本七平の「日本的革命の哲学」を読んでもらいたい。

### 第1節 承久の乱

承久の乱（じょうきゅうのらん）は、鎌倉時代の承久3年（1221年）に、後鳥羽上皇が鎌倉幕府執権・北条義時の討伐の兵を挙げて敗れた兵乱のことである。

承久元年（1219年）1月、3代将軍源実朝が甥の公暁に暗殺された。実朝の急死により、鎌倉幕府の政務は北条政子が代行し、執権である弟の義時がこれを補佐することとなった。

幕府は新しい実朝の後の将軍として雅成親王を迎えたいと後鳥羽上皇に申し出る。これに対し、後鳥羽上皇は、長江荘、倉橋荘の地頭職の撤廃と仁科盛遠の処分の撤回を条件として提示した。義時はこれらを幕府の根幹を揺るがすとして拒否する。地頭職は、鎌倉幕府の成立とともに新たに設置されたものであり、その任命権は幕府側にあった。仁科盛遠は、熊野参詣の折に後鳥羽上皇の知遇を得て西面武士として後鳥羽天皇に仕えることとなったが、執権・北条義時に無断でなされたために所領を没収された。義時が幕府の根幹を揺るがすとして後鳥羽上皇の条件を拒否したのは当然である。

義時は弟の時房に1000騎を与えて上洛させ、武力による恫喝を背景に交渉を試みるが、朝廷の態度は強硬で不調に終わる。このため義時は皇族将軍を諦め、摂関家から将軍を迎えることとし、同年6月に九条道家の子・三寅（後の九条頼経）を幕府の将軍として迎え、執権が中心となって政務を執る執権体制となる。将軍継嗣問題は後鳥羽上皇にも、義時にもしこりが残る結果となった。

朝廷と幕府の緊張はしだいに高まり、後鳥羽上皇は討幕の意志を固めたが、土御門上皇はこれに反対し、摂政近衛家実やその父基通をはじめ多くの公卿達も反対、または消極的であった。順徳天皇は討幕に積極的で、承久3年に懐成親王（仲恭天皇）に譲位し、自由な立場になって協力する。また、近衛家実が退けられて、新帝外戚の九条道家が摂政となっ

た。密（ひそか）に寺社に命じて義時調伏の加持祈祷が行われた。討幕の流説が流れ、朝廷と幕府の対決は不可避の情勢となった。

承久3年5月14日、後鳥羽上皇は「流鏑馬揃え」を口実に諸国の兵を集め、北面・西面武士や近国の武士、大番役の在京の武士1700余騎が集まった。後鳥羽上皇は諸国の御家人、守護、地頭らに義時追討の院宣を発する。同じ日に朝廷からも義時追討の官宣旨が出されている。同時に、備えとして近国の関所を固めさせた。後鳥羽上皇方の士気は大いに上がり、「朝敵となった以上は、義時に参じる者は千人もいないだろう」と楽観的だった。

しかし、上皇挙兵の報に鎌倉の武士は大いに動揺したが、北条政子が御家人たちに対して鎌倉創設以来の頼朝の恩顧を訴える大演説を行ったことで、で彼らの心が動かされ、義時を中心に鎌倉武士は結集することとなった。これはあまりにも有名なことなので知っている人も多いと思うが、念のため、その大演説の内容を紹介しておこう。その大演説の内容は、現代語訳であるが、次のとおりである。

『 みな、心を一つにして聞きなさい。これは私の最後の言葉です。源頼朝殿が、平家一門の朝敵を滅ぼし、ここ、関東にわれわれの幕府を作った。それ以来、皆の官位は上がり、収入も増えた。それもこれもすべては頼朝殿のお陰である。その恩は山よりも高く海よりも深い。しかし、今、その恩を忘れ、天皇や上皇をたぶらかす者があらわれ、朝廷より理不尽な幕府討伐命令が出された。「名こそ惜しむ者」は、朝廷側についた藤原秀康・三浦胤義らを早々に討ち取り、三代に亘る源氏将軍の恩に報いなさい。さあ、もし、この中に朝廷側につこうと言う者がいるのなら、今すぐ名乗り出なさい。』

## 第2節 北条泰時の出陣

義時、泰時、時房、大江広元、三浦義村、安達景盛らによる軍議が開かれ、箱根・足柄で徹底抗戦をする慎重論に対し、大江広元は京への積極的な出撃を主張した。政子の裁決で出撃策が決定され、素早く兵を集め、5月22日には軍勢を東海道、東山道、北陸道の三方から京へ向けて派遣することとした。しかし、あまりにも急な派兵であったため、北条泰時を総大将とする東海道軍は当初18騎で鎌倉を発向する。泰時は途中で鎌倉へ引き返し、天皇が自ら兵を率いた場合の対処を義時に尋ねた。義時は「天皇には弓は引けぬ、ただちに鎧を脱いで、弓の弦を切って降伏せよ。都から兵だけを送ってくるのであれば力の限り戦え」と命じたと言う（『増鏡』）。

その後、幕府軍は道々で徐々に兵力を増し、『吾妻鏡』によれば最終的には19万騎に膨れ上がったという。

北条朝時率いる北陸道軍4万騎も砺波山で京方を撃破して、加賀国に乱入して京を目指した。

武田信光率いる東山道軍5万騎は木曾川で京方2000騎を撃破した。美濃・尾張での敗報に京方は動揺して洛中は大混乱となった。後鳥羽上皇は自ら武装して比叡山に登り、僧兵の協力を求めるが、上皇の寺社抑制策が禍して比叡山はこれを拒絶。やむなく、京方は残る全兵力をもって宇治・瀬田に布陣し、宇治川で幕府軍を防ぐことに決め、公家も大將軍として参陣した。6月13日、京方と幕府軍は衝突。京方は宇治川の橋を落とし、雨のように矢を射掛け必死に防戦する。幕府軍は豪雨による増水のため川を渡れず攻めあぐねたが、翌14日に佐々木信綱を先頭に強引に敵前渡河し、多数の溺死者を出しながらも敵陣の突破に成功。京方は潰走し、14日夜には幕府軍は京へなだれ込んだ。

「朝敵となった以上は、義時に参じる者は千人もいないだろう」と楽観的だった後鳥羽上皇は、西国の武士に対する公権力による動員の発動に追い込まれた。しかし、京都周辺地域からの兵力の確保に成功していたものの、鎌倉方の進撃が予想以上に早く、西国の武士たちが上皇の命を受けて京方に参戦する前に承久の乱は終わってしまった。いかに後鳥羽上皇の水戸通しが甘かったか……。

### 第3節 北条泰時の戦後処理

北条泰時は、承久の乱の戦後処理として、まず後鳥羽上皇の血を引かない守貞親王に院政を敷いてもらうよう要請。これを承諾した守貞親王は、後高倉院として院政を始める。天皇になったことのない皇族が院政をはじめるのは異例のことであった。次いで、北条泰時が天皇として選んだのが、当時10歳だった[後堀河天皇](#)。後堀河天皇の即位が完了すると、後鳥羽・順徳・土御門の3人の上皇が配流となる。このようにして、北条泰時は、鎌倉幕府の政治的権力を守りながらも、天皇の政治的権威を守ったのである。そして、最終的には、御成敗式目という法律をつくり、この国のあるべき姿を作り上げたのである。

承久の乱は、鎌倉時代の承久3年、仲恭天皇（ちゅうきょう）の時代の兵乱であるが、天皇はまだ幼少で力はなく、後鳥羽上皇の思惑通りに事は進んだ。仲恭天皇は、何もわからないまま4歳で天皇となり、わずか70日余りで退位となり、明治までは、歴代天皇系図からも排除されていた天皇である。順徳天皇が父、後鳥羽天皇が祖父である。天皇にまったく罪はない。

首謀者である後鳥羽上皇は隠岐島、順徳上皇は佐渡島にそれぞれ配流された。討幕計画に反対していた土御門上皇は自ら望んで土佐国へ配流された。乱後、幕府軍の総大将の泰時、時房らは京の六波羅に滞在し、朝廷の監視や西国武士の統率を行う。朝廷は京都守護に代り新たに設置された六波羅探題の監視を受けるようになり、皇位継承をも含む朝廷に対する鎌倉幕府の統制が強化された。京方の公家、武士の所領約3000箇所が没収され、幕府方の御家人に分け与えられ新補地頭が大量に補任された。

後鳥羽上皇・土御門上皇・順徳上皇の配流ほど驚愕すべき事件はわが国の歴史上他に例を見ないが、次の第4節で述べるが、北条泰時は、明恵の思想によってやるべきことをやったまでであり、悪いのは後鳥羽上皇である。後鳥羽は、建久9年、土御門天皇に譲位し、以後、土御門、順徳、仲恭と承久3年まで、3代の天皇の間、23年間に亘り上皇として独断の院政を敷く。上皇は仲恭天皇の時代に後鳥羽上皇の他に土御門上皇・順徳上皇もいるが、土御門上皇・順徳上皇は、結局、後鳥羽上皇の意に反する事はできなかったのである。

承久3年（1221年）の承久の乱により、鎌倉幕府は後鳥羽上皇・土御門上皇・順徳上皇の三上皇を配流し、仲恭天皇を退位させた。次代皇位継承者には、乱の首謀者である後鳥羽上皇の直系子孫を除外し、後鳥羽上皇の兄・守貞親王（行助入道親王）の三男であり、出家していなかった茂仁王（後堀河天皇）を即位させた。茂仁王も十楽院僧正仁慶の弟子となり、すでに十楽院に入室していたが、まだ正式に出家していなかった。立太子礼を経ずして、仲恭天皇退位後、同日の承久3年7月9日踐祚、同年12月1日即位。

## 第4節 北条泰時の師匠・明恵

義時・泰時に配流された後鳥羽上皇その人、さらにこれを行なった当事者である泰時には、どのような評価が下されているのであろうか。確かに今までのような例があるとはいえ、これはあくまでも朝廷内のこと、たとえ幕府ができて、それが名目的には朝廷

内の一機関ならともかく、「天皇制政府」以外に「幕府制政府」とも言うべきものを樹立し、陪臣でありながら三上皇を配流に付して天皇を退位させ、勝手に法律を発布するなどと言うことは、「皇国史観」の源流とされる水戸学では到底許すべからざることではないのか？

後鳥羽法皇を、武士の頭領でもない北条一族が処分した。これは大変なことで、天皇を敬う立場からは、北条一族はケシカランということになる筈である。そこをどう理解するかということがポイントであり、問題の核心部分である。

山本七平は、その著書『[日本的革命の哲学](#)』のなかで、「皇国史観」の源流とされる水戸学において、義時・泰時のとった行動を「ベタホメ」しているさまを紹介している。そして、水戸学は、すべての原因が「その始めを正さざる」にあったとして、批判は専ら後白河法皇に向けている。

また、『神皇正統記』の著者の北畠親房・・・この南朝正統論の「生みの親」こそ、最も徹底した泰時批判論者であって不思議ではない。それがやはり、「後鳥羽上皇がよろしくない」であり、「泰時は立派だ」としている。まことに不思議なのだが、その立場からして当然に泰時に徹底的な批判を加えて然るべき人間が、すべて「泰時だけは別」としている。一体この不思議はどこから出たのであろう。わが国の歴史において、彼のような位置にありながら「ベタホメ」にされるということは、日本人の心底にある、ある種の「理想像」を彼が具現していたと思われ、その理想像を形成した「思想」と彼の制定した「法律」こそ、以後の基準になっていると思われる。

泰時は、京都に進撃した総司令官であり、そのうえ朝廷から立法権を奪って勝手に『関東御成敗式目』という法律を発布した。天皇のみ正統でこれが絶対なら、泰時は日本史上最大の叛逆者であり、どのような罵詈雑言が加えられても不思議でないはずである。ところがまことに不思議なことだが、泰時への非難はまさにゼロに等しい。「皇国史観」の源流とされる水戸学ならびに『神皇正統記』の著者の北畠親房でも、当然、泰時への批判は実に峻烈になりそうなものだが、奇妙なことに「ベタホメ」なのである。

そうした考え方はまさに孟子の革命論——天意＝人心論——であろう。「白板天子」後鳥羽上皇への「嘲弄」と、その失徳と失政は、結果として孟子のいう「獯（だつ）（かわうそ）なり、せん（亶に鳥）（とび）なり」となって人民を幕府の方へ追いやってしまったので、幕府は「王たることなからんと欲すといえども、得べからざるのみ」という形になった。それなのに義時は終生「位、四品を躡えず」で自らが王になろうとする野心

なく、専ら仁政を施したのは立派で、「天下に功無しと請うべからず」なのである。義時でさえこうであれば泰時が「ベタホメ」になって不思議ではない。

6月16日、泰時は、六波羅の屋敷に入って占領行政を開始した。泰時が18騎とともに鎌倉を進発してから21日目のことである。

泰時は、大体において処罰の嫌いな人間であったようで、承久の変で処刑者が少なかったのもおそらく彼の建議で、また彼は、敵方の人間を助けようとさまざまに努力している。そういう彼であっても、敗残兵の小部隊で所々に蟠踞して盗賊化すれば治安上放置するわけにはいかない。ところが梶尾の山中に多くの軍兵が隠れているという風説があり、そこで安達景盛が山狩りを行ない、どうも意識的に軍兵をかくまっているらしい僧侶を見つけて逮捕し、これを泰時の面前に引きすえた。これが高山寺の明恵（みょうえ）上人であった。泰時は驚いて明恵上人を上座にすえ、この非礼にどうしてよいかわからぬ体であった。上人は静かに口を切ると次のように言った。

「高山寺が多くの落人を隠して置いたという風説があるそうだが、いかにもその通りであろう。大体私は、貴賤で人を差別しようという心を起すことさえ、沙門にあるまじきことと考え、そういう心をきざしても、それを打消すことにしている。また人から何かの縁で祈禱を頼まれても、もし祈って助けることができるなら、何よりも先に一切衆生が三途に沈んで苦しむのを助けるべきで、夢のような浮世のしばしの願などを祈ることは、大事の前の小事だから受けつけたことはない。このようにして歳月をすごして来たから、私に祈ってもらったなどという人はこの世にはいないであろう。しかしこの山は、三宝寄進の所で殺生禁断の地である。鷹に追われる鳥も、獵師に追われる獣も、みなここに隠れて助かる。では、敵に追われた軍兵が、かろうじて命を助かり、木や岩の間に隠れているのを、わが身への後の咎を恐れ、情容赦なく追い出し、敵に捕えられ命を奪われても平然としておられようか。私の本師釈迦如来の昔は、鳩に代って全身を鷹の餌とし、また飢えた虎に身を投げたという話もある。それほどの大慈悲には及ばないが、少しばかりのこともしないで、よいであろうか。隠し得るならば、袖の中にも袈裟の下にも隠してやりたいと思う。この後も助けよう。もしこれが政治のために困ると言うなら致し方ない。即座に私の首をはねられたらよかろう」

泰時は深く感動し、武士の狼籍を詫び、輿を用意して高山寺に送りとどけた。この話はどこまで事実かわからない。しかし明恵上人と泰時との運命的な出会いが、彼が六波羅に居たときのことであったのは事実、また泰時が心の底から尊敬したのは明恵上人であり、同時に、泰時に決定的な感動を与えたのも明恵上人であったであろう。これは二人が交わした歌にも表われている。天皇も上皇も泰時には絶対でなかった。そして絶対だったのは、おそらく明恵上人なのである。

明恵上人に感動して泰時がその弟子となった。このことはフィクションではない。明恵上人の泰時への影響は実に大きく、明恵の弟子喜海が著わしたといわれる『梅尾明恵上人伝記』によると後の泰時の行動原理はすべて明恵上人から出たもので、彼の時代に天下がよく治まったのも、彼自身が生存中も死後も前述のように「ベタホメ」であるのも、すべて明恵の教えに従ったためだと言うことになる。こうなると『貞永式目』にも明恵上人の思想が深く反映していることになる。

明恵については、次のような私の論文があるので、是非、じっくり読んでいただきたい。

<http://www.kuniomi.gr.jp/geki/iwai/myouearu.pdf>